

『ONE TEAM』は一日にして成らず



理事 長 佐々木 信

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が、世界中で社会経済のあらゆる分野に大きな影響をもたらしています。安倍総理大臣は、3月14日の記者会見において、「全国津々浦々、心を一つに、正にワンチームで現在の苦境を乗り越えていきたい」と述べました。福祉施設・事業所においては、ひとたび感染者が発生すると集団感染に繋がるリスクが非常に高いため、我々も、その防止に、利用者やご家族、関係者等のご協力をいただきながら、役員二丸となつて取り組んでいきます。

ところで、総理が引用した「ワンチーム(ONE TEAM)」は、ラグビー日本代表のスローガンであり、昨年のワールドカップ(W杯)での史上初の8強入りの活躍とともに大いに取り上げられ、流行語大賞にも選ばれたことは、皆さんご承知のとおりです。

これに便乗して、ビジネスシーンをはじめいろいろな場面で、この言葉が使われました。非常に使い勝手の良い

言葉であり、ついつい乱用したくなるのですが、掛け声だけで実体が伴っていないと、反発やしらけを惹起して、逆効果になる懸念もあります。

そもそも、ラグビー日本代表が「ONE TEAM」を打ち出したのは昨年ではなく、その3年前の2016年です。就任直後のジョセフヘッドコーチ(HC)と選手のリリーダー達との話し合いの中で考案された言葉だそうですが、当時はマスメディアでもほとんど取り上げられませんでした。

言葉を掲げただけでそれがすぐにチーム内に浸透するほど、甘くはありません。私はラグビーファンとして日本代表の試合はほとんどテレビ観戦してきましたが、ジョセフHC体制発足から暫くは、前任のエディHC時代の戦術を変更した意図を選手が消化しきれず、スキルも不十分だったため、芳しくない結果が続き、チームとしてまとまっていけないという印象を強く受けてきました。

そこから、度重なる合宿において、ハードな練習でスキルを磨くとともに濃密なミーティングで共通認識を構築し、また、試合を行うごとに経験値を段階的に上積みしていくことで、選手・スタッフの相互理解と連携を深めることができ、それが「ONE TEAM」として結実して、W杯での快進撃が生まれたのだと思います。

さて、当事業団におきましては、令和2年度が中期経営基本計画の最

終年度であり、引き続き役員が心を一つに達成に取り



組んでいかなければなりません。また、事務局と各施設・事業所が連携を密にしながら次期計画の策定を進めており、今まで以上に「ワンチーム」として結束する必要があります。

そのためには、職員が日常の業務に精勤する中で、働き甲斐を持ち成長を実感できる、風通しの良い職場づくりを進めていくことが重要です。単に「ワンチーム」と唱えさえすればそれが実現する、というものではありません。

日々の地道な取り組みを積み重ねることにより、各職場が、そして事業団全体が、真の「ワンチーム」となるよう、力を合わせていきましょう。

